

雑誌『信濃』第五一巻第五号通巻第五九二号

平成二一年五月一日発行所載別刷

古墳と古墳時代の定義設定の再考

松

澤

芳

宏

古墳と古墳時代の定義設定の再考

松澤芳宏

古墳がいつどこで造られ始め、古墳時代は何世紀から始まるのか、

古代史における重要な問題である。長らくこの問題について先学の考え方を探ってきたが、諸説入り乱れ、納得のできる結論に達していない。

古墳時代の開始について解決ができない原因はどこにあるのだろうか、それは、しばりいって、ものを難しく見ようとする現在の学界の風潮にある。古墳の定義、古墳時代の設定はいかにあらるべきか、角度を変えて、ごく簡単にこの問題を考えてみたい。

まず、古墳・墳丘墓・台状墓・周溝墓などについて、すっきりとその違いを説明できる人はいないだろう。例えば初現的な前方後方

形墓の論文や報告に、古墳と記述したうえで『(墳丘墓?)』などと書かれた例が実に多いのである。さらに、それの中には周溝墓という記述もある。古墳・墳丘墓・台状墓・周溝墓については、多かれ少なかれ墳丘のある墓で、簡単に言つてみれば、土の盛りあがりがあるという点では同じであり、これは古墳に統一

されて良いのではないかという考え方がある。

古墳とは、現代の何らかの規準をいうのであって、古代にはそんな規準はなかった。ただ、一定の年代幅のなかで、形の大きさや副葬品の豪華さを誇ることはありえただろう。なにを古墳とするか、いろいろな意見があるが、すべて個人的見解の正論であって、他人の説を間違いということはない。古墳を定義するには、話し合いによる一定の規準しかないとしよう。墳という字には既に盛り上がりついでいる墓という意味があると言ふ、古墳とは高塚式古墳の略称から定義されたものという。

私は古墳の定義は内部構造や副葬品などは度外視して、その語源から、単純に墳丘のある墓を定義したい。その規模は土まんじゅう程度の小さな墳墓を除いて、便宜上径三尺以上を目安にしたい。

ここで、弥生時代の墳丘のある墓制についてふると、周溝墓は方形あるいは円形の周溝を有する墓で、盛土の認められるものもあり確認できないものもある。ただし、埋葬主体部が周溝確認部分の

レベルで確認できない例が多く、その多くには墳丘があつたと理解できる。ついで台状墓は地形を削り出して墳丘をつくる墓で、当然周溝を伴うものがある。周溝墓と台状墓の違いは狭い尾根に構築されたものが台状墓で、平地や丘に築かれたものが周溝墓であろう。平地では削り出しによる墳丘の造成は無理で、両者は基本的には何ら区別することができないのである。関東に台状墓が少ないので狭い尾根が少ないからである。

墳丘墓については本来は岡山県の楯築遺跡の双方中円形墓（双方中円墳としてよい）に対し便宜的に言われだしたものだが、一般的に、墳丘をそなえる弥生時代の墓を言っているようである。

これらは考古学者のみに通用する墓制区分であつて、一般の方々からはあまり理解が得られないのが現状であろう。私も墳丘墓・台状墓・周溝墓の区別はあまり意味がないものと考える。学界で墳丘墓と言われるものの大半に周溝が認められ、周溝墓との区別は発掘時点の墳丘のある無しの判断によっているらしい。あえていうならば、墳丘墓は、弥生時代に古墳があつてはならないという既成概念に束縛された考え方から、流行した新語と見てよいだろう。

冷静に古墳と墳丘墓の語源をかんがえると、古墳は古い盛り上がりの墓、墳丘墓も盛り上がりのある墓である。古いは年代的なものを指している以外、両者は同じであると考えるのは私だけであろうか。ここで私はこれら墳丘のある弥生時代の墓をすべて古墳と呼んでよいと確信する。かつて原田大六により、弥生古墳という言葉が使わ

れたが、いわゆる平原王墓が弥生時代末期なのか古墳時代初めなのが私は判断できないものの、この『弥生古墳』の用語は今後大いに使用されることを望みたい。ただし、遺跡の現状での説明上、周溝墓などの従来の呼称が採用されることはあり得よう。

ここで、仮に弥生時代のいわゆる墳丘墓・台状墓・周溝墓を古墳に加えた場合、識者の方々の危惧する現象として、弥生時代はすでに古墳時代となってしまうという問題がある。これは、基本的には最も合理的なものであろうが、従来の弥生時代の概念では、全長一〇〇尺を越えるような際立った墳丘を見ることはできないから、弥生時代を古墳に象徴する時代に置き換えるのに、躊躇する人が多いだろう。

我々の意識の中で、古墳時代としてふさわしい要素として、巨大な古墳を思いうかべる人は多いだろう。前方後円（前方後方）形の墳丘形態、木棺や石室などの棺槨からなる内部構造、鏡や刀剣や玉類などの副葬品構成などをもつた墳墓の登場をもって、古墳と古墳時代を定義づけるむきもあるようだが、墳丘の巨大さということを除けば、巨大古墳出現以前にもその条件を満たす要素がいくらかあるときもあり、古墳の定義としてはふさわしくはないのではないか。学界では古墳の造られた時代と古墳時代は同じとする考え方がかなり浸透しているが、今日の古墳の定義について、この意識が問題解決の困難さを露呈していると見たい。私は古墳時代と古墳の定義をそれぞれ分けて考へることを主張したい。

まず、一般的に最も分かりやすい古墳時代の定義として、墳丘規

模の大小を問題にしたほうがよいと考えたい。もちろん、弥生時代に古墳があつても、なんら差し支えはないのである。

筆者は、すばり言って、径（全長）八〇尺～一〇〇尺を前後するか、それより大きい古墳をもつて巨大古墳とし、巨大古墳の複数墳墓の登場をもつて古墳時代とすることを提案する。一〇〇尺では巨大古墳ではないのではないかと言う人もあるかとおもうが、巨大といふことに規定があるわけではなく、畿内では巨大ではなくとも、地方においては巨大なのであり、この規模に達する古墳は県別にみると、極めて少ないのである。

では、この古墳時代論にたてば、我国では何世紀から古墳時代が始まるのだろうか？『魏志の倭人伝』に卑弥呼の墓が径百余歩であるとあり、徑約一五〇尺余りとされる。文献の信憑性を信ずれば三世紀中頃には既に古墳時代に入つてことになる。一説に、卑弥呼墓を盛土の少ない方形周溝墓とする説があるが、直径一五〇尺もあれば高い盛土をもつていると考えたほうが自然であろう。もちろん私流に言えば、方形周溝墓も古墳である。ちなみに、奈良県箸墓古墳（前方後円墳）の後円部の直径が卑弥呼の墓の規模にほぼ等しいとされ、箸墓古墳を卑弥呼墓にあてる説がある。

箸墓古墳については、最近、周溝部分の発掘調査が行われ、布留0式土器が多量に出土したことである。そして布留0式の年代観から同古墳を三世紀後半の築造とする意見が出されたが、年輪測定による布留0式の年代観が解明されていないので結論はまだ出ていないとしてよい。多くの識者が言うように、箸墓古墳の築造を三世紀中頃に置くことの可能性はまだ残されているのである。

また、箸墓古墳以前の巨大古墳として全長九六尺の奈良県纏向石塚古墳が周知されているが、これを墳丘墓とするか、古墳とするか議論が分かれているが、この議論は水掛け論であつて、なんら意味はない。先に記したように、墳丘をもつ墓はすべて古墳としたいし、全長一〇〇尺に近い墳丘の出現は古墳時代の設定を論議する重要な史料である。纏向石塚古墳の築造年代は、墳丘内出土土器により三世紀前半とする説が既にでている。ただし、この土器、すなわち纏向一式～二式初頭の年代観もまた、将来、若干の年代変動もあり得ないことではない。ちなみに、纏向石塚古墳の出土の木片の年輪測定は紀元一七七年とされるという。纏向一式は一七七年にやや近づいた年代も考慮にいれておくべきだ。纏向石塚古墳は二世紀末～三世紀前半という幅広い年代をひとまず考えておいた方がよい。この年代観により、纏向石塚古墳は今のところ約一〇〇尺級の古墳としては日本最古級の古墳といえよう。この古墳が登場したのち、三世紀半ばに卑弥呼墓が登場することになるが、纏向石塚古墳を卑弥呼墓とする可能性を説く人もあり、土器年代をより新しくみればその可能性がないわけではない。

しかし、仮に石塚古墳を三世紀半ばにおいても、少なくとも三世紀中頃には古墳時代に入つていた可能性が成り立とう。また、箸墓古墳を卑弥呼墓に当て、石塚古墳をそれ以前とすれば二世紀末ないし三世紀前半には古墳時代に突入してきた可能性もでてくる。複数巨大古墳の出現を念頭においても、古墳時代は三世紀中頃には始まつ

ていたと考えたい。

なお、古墳時代の終焉については、巨大古墳を意識すれば、ほぼ飛鳥時代以前を古墳時代としてよいのである。古墳はしばらく築かれ続けるが、小規模古墳のある弥生時代を古墳時代と呼ばないのと同様に、飛鳥時代以降を飛鳥時代のことばがあるのであるから、無理に古墳時代としないでよいのである。ただし、文化史的立場から古墳時代の終焉を引き伸ばして解説することは、従来からの慣例で許されてよいと考える。

さて、古墳の定義を古代の墳丘のある墓としたことから、新たに派生する諸問題がたくさん出て来よう。このことについて若干の考え方を述べておく。

まず、古墳の発生はやはり大陸文化の影響にあり、当然、距離的に近い西日本が古い古墳の集中する地域となる。ちなみに、弥生時代に、ある程度古墳が各地に普及しても、たとえば山陰地方の四隅突出型方墳（四隅突出型墳丘などとよばないでよい）の墳丘の高さなどの度合いは、東日本の方形古墳（いわゆる方形周溝墓）の予想される盛土の高さを越える例が多いことは誰しも認めるだろう。また、貼り石の多さも、山陰地方が勝っている。吉野ヶ里遺跡の弥生古墳も東日本の同時期のものと比較したとき、はるかに規模が大きい。古墳の波及は確実に西日本から東日本に伝わっているのである。

逆に、従来说どおり、巨大前方後円墳を古墳の発生に求めると、古墳は畿内の大和中心に発生しているかのように見える。私もこの説に従って考えたこともあるが、あくまでもそれは古墳の巨大化の

発端が大和にあるのであって、古墳の発生が大和であることにならないのである。ただし、巨大古墳の発生は、大和中心の巨大政治勢力の始まりを意味しよう。また、古墳の内部構造や副葬品を加味し

た、いわゆる畿内型古墳の定義についてはなんら反対するものではない。ただ、畿内型古墳からを古墳と定義すると、古墳の発生についての議論は、墳丘をもつ墓の出現がすごく前という問題から、いいよ混迷を深めるのである。

次に、前方後円墳・前方後方墳の発生問題について触れると、この問題については単に前方後円墳だけに焦点をあてるに、最大の欠陥があると確信する。つまり、方形部突出型古墳の発生を考えればよいのであり、この類型に四隅突出型方墳・双方中方墳・双方中円墳・前方後円墳・前方後方墳その他があろう。

周知のよう四隅突出型方墳は出雲を初めとして日本海沿岸地方に多く分布し、双方中円墳は瀬戸内から畿内地方に分布する。そして前方後円墳・前方後方墳は日本列島の大半に分布する。

ちなみに現在までの考古学調査からみると、初め四隅突出型方墳がより大陸に近い日本海沿岸地方に多く出現する。次いで、双方中円墳・双方中方墳などが瀬戸内に出現する。それと同時に、前方後方墳は畿内・東海地方に今のところ初期のものがあるようだが、弥生後期に双方中方墳のある瀬戸内や四隅突出型方墳の卓越した山陰や北陸地方にも、将来は初期前方後方墳が発見できる可能性はある。前方後円墳は畿内に古いものがあるが、最近の情勢では瀬戸内でも弥生中期にその兆しの墓が発見されているようである。

また、四隅突出型方墳の類型は、意外にも東国各地でも発見されている四隅の周溝が切れるタイプの方形周溝墓（古墳）であろう。ただし、より大陸に近い地方に流行した四隅突出型方墳は盛土が高いものがあり、自然と墳丘への通路も目に見える程高くなり、四隅突出型古墳の形態になったといってよいだろう。

四隅突出型方墳やその類型古墳が流行した地域では次第に方墳の一辺にのみ通路のつく形が重視され、前方後方墳をうみだしたものと考えられ、一方、早くから円形墳の萌芽があつた瀬戸内や畿内地方のどこかでは一つの通路のある形が採用され前方後円墳をうみだしたと考えたい。通路が突出部（前方部）になることは最近の通説だが、早くからの、前方後円墳が中国の影響で円墳に方形壇が付設したという説も捨て難い。どちらの説をとるかと言うよりも、したいに前方後円形に近づくにつれ、通路に祭壇の意味も加わったと見たらどうだろうか。また、最近、朝鮮半島でも方墳の一辺にのみ通路がつく方形周溝墓が発見されており、前方後円墳・前方後方墳の発生問題は大陸文化の影響が少なからずあることは疑いない。

前方後円形の前方部に祭壇が加わってしばらくして箸墓古墳のような定型化した前方後円墳をうみだしたと推測され、定型化が進むなかで、本来の通路が、前方部やその他の部分につながる形で後代にもひきつがれるのである。また、やがては前方部も祭壇の意味が薄れ、遺体を埋葬し、祭壇はやがてくびれ部にも設けられ、いわゆる造り出しが出現することになる。また、柄鏡形前方後円墳は前方部祭壇の、より意味がふかまつたもので、箸墓古墳が出現する時期

か、それ以後において顕著なものがみられ、間もなくまたもとの前方部が開く形にもどっていったのだと解釈されまい。また、祭壇の性格上、帆立貝式古墳のあるものにその形態が残存されたと解釈したい。

ところで、再度言いたいが、畿内や瀬戸内では前方後円墳と同時に前方後方墳をうみだす兆候もあるのである。この地域を前方後円墳のみをうみだした地域、東海地方は前方後方墳をうみだした地域と信じている人が多いが、この考え方は何ら意味がない。京都府・奈良県・岡山県でも東海西部と肩を並べる古い前方後方墳や双方中方墳が見つかっている。

私がもともと主張したいことは、前方後方墳については、一部東日本を含み、西日本の広い地域に相互に影響を与えながら発生し、前方後円墳は瀬戸内・畿内の狭い地域に前方後方墳と相互に影響をあたえながら発生したのではないかということである。

ちなみに、畿内・瀬戸内に前方後円墳が発生することは、この地方が早くから大陸の円形墳に影響を受けていたことの証明と仮説し、邪馬台国畿内説に従う立場をとりたい。逆に長野県北部から群馬県に続く地域に、弥生時代に円形周溝墓（古墳）がみとめられることは、邪馬台国に対立する狗奴国か、またはその勢力圏内と推定し、狗奴国が独自に大陸と、交流していたのではないかと推定する。

本論に帰り、大勢的には突出部のたくさんある古墳から前方後円墳・前方後方墳の形にしだいに整理され（通説に従う）、且つ畿内大和の巨大古墳の登場を契機に、政治的事情もあって地方にも巨大古

墳が登場するようになったと考えたい。巨大古墳の多くが前方後円形を採用していることについては、巨大化のゆえに、設計のたやすさと、土量の節約が前方後円墳だからこそ可能であったと考えられるのである。また、先に述べたように、日本の円墳指向は大陸文化の影響も考えられ、前方後円墳の普及後、列島各地が方墳指向から円墳の流行に変化していくことにも注意したい。

次にここで、前方後方墳が東海勢力によって発明され、東海政権の進出によって各地に伝わったとする意見に反対することを述べる。この考え方の基本は初現期前方後方墳が東海西部にあるということがあるらしい。しかし、畿内でも初現期前方後方墳は発見されつたり、先に述べた山陰地方の弥生時代からの方墳の流行がやはり前方後方墳成立の要因に成りかねないという疑念があり、西日本にも広く目を向けて検討を重ねるべき事は前に述べた。

ただ、東日本では前方後方墳から東海系土師器が発見される例が多く、北陸地方でもそのような情勢があり、よって東海勢力の進出とかの説がてきたものと思う。しかし、松本市弘法山古墳のよう

に東海系土師器とともに畿内系の土師器の要素も検出され、このことについては東国各地の前方後方墳についても検討すべきことかと思われる。

東日本の東海系土師器と北陸系土師器の北上は畿内系土師器の要素も組み入れての北上なのであり、その背後に、畿内政権が支配下の氏族をさらに畿内政権の外郭地帯に派遣するといった政治的動向が含まれている可能性を考えることも必要であろう。『古事記』・

『日本書紀』にある崇神天皇による四道將軍の派遣記事もあながち

軽視すべきものではなかろう。將軍のみではなく、一般の住民も各地に移動して、それぞれの役割をはたし、土器やその他の文化物にも全国に共通する事象が備わってきたものと推定したい。

以上、若干本論にそれた嫌いはあるが、ここでまとめてみると、本論はその語源から、古墳と墳丘墓と同一であるとし、弥生時代の墳丘のある墓も、古墳に加えることを主張した。また、墳丘墓の名称に代わり、かつて原田大六らによつて提唱された『弥生古墳』の用語が復活される事を望んだ。ただし、方形周溝墓などの用語は、発掘された時点での所見から、慣例的に記述されることは否定しない。

また、古墳と古墳時代は分けて考え、古墳時代は徑（全長）八〇～一〇〇尺をこえる複数巨大古墳の登場をもつてその始まりと定義した。さらにこれらの事から派生する諸問題の見通しを少し述べた。

本論によつて、例えば、飯山地方の古墳について、佐賀県吉野ヶ里遺跡の四〇尺規模のいわゆる墳丘墓より大きなものが一つもないといった矛盾がみごとに解消され、さらに各地でも違和感なく受け入れられることを信ずる。また、考古学研究者及びそれ以外の立場からも広く本論のご批判を賜りたい所存である。

なお、本論はあまりにも大きい日本史上の問題だけに、すでに多くの人の指摘済みの箇所があるとおもうが、そういうことがあれば、その説の補強ということにしたい。失礼をお許し願いたい。また、繁雑をさけるため、参考文献を削除した。このことについてもおわび申す次第である。